山形県庄内地方の地主による救済事業庭園の成立過程とその社会政策的側面

Study of Social Policy-side in Relief Works Garden Formation of the Landowner of the Yamagata Prefecture Shonai district

齋藤 裕幸* 服部 勉** 進士五十八**
Hiroyuki SAITO Tsutomu HATTORI Isoya SINJI

Abstract : At the Shonai district in Yamagata Prefecture, the northern region of Honshu, there were six huge landowners' gardens (relief works garden below) constructed for the needy tenantry during the bad harvest and for the unemployed during the wintertime. Then, this study showed how the relief works garden at the Shonai district developed under the social policies which are called relief works. As a result, the factor that the landowner garden had been grown was integrated into following three points; (1) a longing for making the landowner garden, (2) a necessity of relief works, (3) a surrounding of snowy country. As to the meanings of the landowner garden, I consider there was, in terms of a garden construction, the social policy-side which is "causing an increase in the opportunity of employment" for the tenantry and stevedore. There also was, in terms of gardening, a meaning of the principles of Landscape Architecture which is "snowy country" as the utilization of regional condition.

Keywords: Yamagata Prefecture Shonai district, landowner system, famine, relief works, social policy, locality

キーワード: 山形県庄内地方, 地主制度, 飢饉, 救済事業, 社会政策, 地域性

1. 研究の背景と目的

山形県庄内地方は日本でも有数の稲作地帯として知られ、戦後の農地解放まで続いた地主制度の下、豪農・豪商などの地主が多数存在し、東北三大地主の一つにあげられる本間家の豊かな経済力を誇る庭園は庄内地方を代表するものとして知られている。

しかし、これまで庄内地方の庭園については網羅的な調査がなされていない。

そこでまず、山形県庄内地方の庭園を把握するために地元新聞「庄内日報」が庄内地方に散在する庭園の所有者にインタビューし、新聞紙上で「名園を訪ねて」と題して1957年8月26日から12月14日までの107回にわたって連載した記事を再構成した『庄内名園百景』¹⁾ (100庭園, 1958年)、追加版として発行された『お庭拝見』²⁾ (40庭園, 1972年1月), 『お庭拝見』³⁾ (50庭園, 1972年10月)の3冊に掲載された庭園を所有者・所在地・作庭年・作庭契機・材料などの点から整理した。

合計190庭園のうち重複するものを除いた165庭園を作庭時代と所有者別に整理すると、地主の所有する庭園がこの中で86庭園を占め、庄内地方における地主と庭園との関係が密接であったことが伺えた。

次に、作庭された契機を見ると、地主たちの庭園では凶作時の窮民化した小作人や、冬期の失業者の救済を目的とする救済事業の一環として庭園が造られたと記録の残るものが5庭園確認出来た(表-1)。以下、本論では地主が救済事業の一環として造った庭園を救済事業庭園と呼ぶことにする。

これまで、救済を目的として造られた庭園については新潟県などで事例が散見されるものの⁴⁾、その作庭の経緯、社会政策的意義等、事実関係の詳細は未だ不明瞭な点が多いのが現状である。

そこで、本研究では、多くの場合庭園は個人の享楽として作庭される中、山形県庄内地方の地主たちによって救済事業の一環として造られた特異な庭園が、どのような社会政策上の意味を有して成立し得たかを明らかにすることを目的とした。

2. 研究の対象と方法

研究対象は前述の『庄内名園百景』、2冊の『お庭拝見』から、地主が小作人・失業者の救済事業として作庭したと確認できた、本間家別荘庭園(酒田市)・藤井家庭園(酒田市)・齋藤家庭園(立川町)・佐藤家庭園(遊佐町)・渋谷家庭園(遊佐町)の5庭園に加え、庄内地方中央に位置する余目町の郷土誌『ものがたり余目誌(下巻)』⁵⁾から、救済事業庭園と判明した阿部家庭園(余目町)の合計6庭園を主対象とした。

研究方法として、まず、救済事業庭園の作庭経緯の詳細を現所有者にヒアリング調査を行った(藤井家庭園は元所有者の藤井家当主にも実施)。また現地での実測調査による平面図の作成を通し、庭園形式・面積・材料等について明らかにした。さらに、庄内地方の庭園・作庭技術については庄内地方の造園業者・市役所・町役場・博物館等へのヒアリング調査と庄内地方の図書館・郷土資料館での文献調査(郷土資料等)を行なった。

次に、救済事業庭園の成立要因については、ヒアリング・文献

表-1 『庄内名園百景』、『お庭拝見』記載の山形県庄内地方の庭園と救済事業との関連

所有者	江戸	明治	大正	昭和		不明	計
				戦前	戦後		
地主	22(2)	28	14(1)	15(2)	6	1	86(5)
武家	5	0	0	0	0	0	5
寺社	11	0	0	4	0	1	16
旅館	2	0	0	3	1	1	7
医者・病院	1	1	0	0	3	0	5
料亭	1	0	1	0	0	0	2
一般住宅	0	3	5	10	23	3	44
計	42(2)	32	20(1)	32(2)	33	6	165(5)

註: 1) 『庄内名園百景』(1958年)『お庭拝見』(1972年1月)『お庭拝見』(1972年10月)の3冊に掲載された190庭園から重複を除外した165庭園を対象。

2) 所有者は作庭当時。

3) () 内の数字は救済事業の一環として作庭された庭園数。

4) 救済事業による5庭園以外160庭園の現存状況は未確認。

*東京農科大学大学院農学研究科造園学専攻博士前期課程 **東京農科大学地域環境科学部造園科学科

表－２ 山形県庄内地方における救済事業として作庭された庭園の概要と作庭経緯

庭園名 (公開)		本間家別荘庭園(鶴岡園) (有料公開)	藤井家庭(授翠亭庭園) (無料公開)	阿部家庭園 (非公開)	齋藤家庭園 (非公開)	佐藤家庭園 (非公開)	渋谷家庭園 (非公開)
庭園 内容	所在地	酒田市御成町	酒田市浜田	東田川郡余目町長畑	東田川郡立川町清川	鮎海郡遊佐町下長橋	鮎海郡遊佐町野沢
	現所有者(平成16年)	(財)本間美術館	酒田市	阿部とく(12代当主)	齋藤文平(4代当主)	佐藤統嗣郎(14代当主)	渋谷守(13代当主)
	当主名	本間光道(4代当主) (1756～1826)	藤井伊兵衛(9代当主) (?～1834)	阿部善兵衛(8代当主) (1846～1917)	齋藤半九郎(初代当主) (1902～?)	佐藤権四郎(13代当主) (?)	渋谷八三郎(12代当主) (1890～1967)
	職業	豪商	豪農	豪農	豪商(製材業)・村長	豪農・村会議員	豪農・町長
	所有耕地 面積	1700町歩(大正14年)	131町歩(大正14年)	57町歩(昭和12年)	不明	不明	35町歩(昭和9年)
	作庭年	文化10(1813)年	天保年間(1830～1844)	明治末期	大正年間(1912～1926)	昭和10年代(1935～1944)	昭和15(1940)年
	作庭者	常世田長翠	不明	不明	庭師(酒田)	杉山仁兵衛(酒田)	杉山仁兵衛(酒田)
	庭園形式	池泉回遊式庭園	池泉回遊式庭園	池泉回遊式庭園	池泉座敷式庭園	池泉回遊式庭園	池泉回遊式庭園
救済 事業 内容	庭園面積	約2770坪	約700坪(現在275坪)	約300坪	約200坪余	約300坪	約560坪
	主な石材	紀州青石 [Ⓐ] 佐渡赤玉石 [Ⓑ] 伊予青石 [Ⓒ] 鞍馬石 [Ⓓ] 島海石	青石 [Ⓐ] 御影石 [Ⓑ] 島海石(東山) 女鹿石	佐渡赤玉石 [Ⓐ] 青石 [Ⓒ] 島海石	赤石 [Ⓐ] 青石 [Ⓒ] 山石	島海石	島海石
	Ⓐ 上方より海運で運搬された石材						
	主な植栽	アカマツ、キヤラ、カエデ類	アカマツ、キヤラ、カエデ類	アカマツ、キヤラ、カエデ類	アカマツ、キヤラ、カエデ類	アカマツ、クロマツ、キヤラ、カエデ類	アカマツ、キヤラ、モミ、ツバキ類、カエデ類
	救済目的	冬期失業(文化年間)丁持(港湾労働者)の冬期失業救済事業	凶作(天保大飢饉)凶作による農民の冬期失業対策	凶作(明治末期)小作料を払えず貧困に苦しむ農民の救済	凶作(大正)生活苦の農民への慈善事業(農民三十余名を雇う)	小作人の生活窮乏への救済事業	小作人たちの救済事業
	被救済者	丁持(港湾労働者)	小作人	小作人	地域住民	小作人	小作人・村民
	施工期間	4～5年	不明	不明	不明	2年～3年	8年
	報酬	砂俵1俵につき賃金を与えた	不明	不明	不明	米2升/日	庭師-1円10銭/日 男-50銭/日 女-35銭/日 あがり(酒付き夕食)付き
労働	内容	諸国の石を港から千人引きという大きな雪櫃(そり)に載せ、雪上を運搬、また、谷地に砂俵を集めて山を築造	石を雪櫃で運搬し、春に施工	近くまで船で石を選び、そこからコロを用いて人力で石を運搬	石の運搬	20～40人で山から樹木・石を植て運搬	樹木・石を大きな檣に載せ村人200人で運搬
	時期	冬期	冬期	不明	不明	冬期	冬期

註:1町歩≒1ha＝0.01km²

調査より明らかとなった作庭経緯の内容を地主と庭園・地主と救済事業・作庭技術と地域性の3つの視点から分析することにした。

3. 救済事業庭園の成立要因

救済事業庭園の成立要因を明らかにするため、救済事業庭園の作庭経緯を、庭園内容(11項目)・救済事業内容(6項目)の大きく2つの視点、計17項目からまとめた表－2をもとに^{5)～25)}、庭園内容の項目から①地主と庭園との関わり、救済事業内容の項目から②地主と救済事業との関わり、③作庭技術と地域性との関わりを分析した。

(1) 地主のステータスシンボルとしての庭園

山形県庄内地方では近世後期になって、農民が豪農と貧農に分かれるようになってくると、村の中には村方地主や豪農、酒田では商人地主が輩出し、土地の集積を進めた²⁶⁾。山形県庄内地方の大正末の調査では県内最大の豪商である本間家(大正14年の最大所有耕地面積1700町歩[1町歩≒1ha＝0.01km²])を頂点に、100町歩以上の地主が18戸、50町歩以上100町歩未満の地主が32戸存在するなど庄内地方には高い経済力を持つ地主が数多く存在した²⁷⁾。

その中で、かつては北前船による上方交易により大いに栄えた港町酒田の商人を中心に上方文化(庭園・華道・茶道・俳諧等)が根付き、酒田市において本間家に次ぐ大地主と言われる藤井家では代々、華道家・茶人・歌人を輩出するなど庄内地方の地主の文化レベルの高さをうかがい知ること出来る²⁸⁾。

酒田市・本間家別荘庭園は、京都から職人を呼び寄せたり、地元の職人を京都に派遣して庭園技術を取得させて、庄内藩主酒井侯の領内巡視の際の接待用として作庭され、庭園には上方交易により酒田港に運ばれた紀州・伊予の青石、佐渡の赤玉石等、諸国の銘石が配されるなど、当時の豪商の経済力の高さが表れている^{15) 29) 30)}。

次に、豪農の庭園趣味に関する記録として、明和5(1768)年の庄内地方北部の村々の様子を記録した『出郷日記』³¹⁾には「川北百姓ハ人品少も富る者は家居を美にし器材を集め庭やら水なと小百姓といえとも木石庭かゝりを好、…」とあり、江戸中期にお

表－３ 庄内地方の主な飢饉と救済事業(直接的・間接的)との関係

年	飢饉	救済事業
宝暦5 (1755)	▲長雨・降霜・イモチ病の発生で大減収、米価高騰	○町長人28人が酒田の3町の困窮者1300人に救米
宝暦8 (1758)	△酒田港の丁持(ちようもち・港湾労働者)の冬期失業が慢性化	○本間光道は冬期失業者に対し、救済事業として酒田西の米を輸送
天明3 (1783)	▲冷害 △安永失調により飢寒病(チフス)が流行 △丁持の冬期失業	○米座・粥屋の設置、廻船問屋が安永米座の設置
文化元 (1804)	▲庄内大地震	○本間光道が300両提供
文化10 (1813)	△丁持の冬期失業	★救済事業として本間家別荘庭園(酒田市御成町)作庭
天保4 (1833)	▲1・5月早稲、6月大洪水、冷夏、9月雪、10月大地震により異常気象	○9月庄内藩が城下の鶴岡、酒田、八幡郷中へ救米 ○9月本間光?が酒田町窮民に米・粥籠手、安永米座の設置
天保7 (1836)	▲冷夏、凶作飢饉、米価高騰	○町奉行、町吏人、医者らが米を安く町人に配給 ○9、12月本間家は酒田安永米座に2900俵の米と157両を提供
天保9 (1838)	△丁持の冬期失業	◎本間光道による失業対策としての別荘大改築
天保 (1830～1844)	▲大凶作(冷害)	★救済事業として藤井家庭園(酒田市浜田)作庭
明治 (1868～1912)	▲明治末期からの相次ぐ凶作	★救済事業として阿部家庭園(余目町長畑)作庭
(1912～1926)	▲不作	★救済事業として齋藤家庭園(立川町清川)作庭
昭和5 (1930)	△昭和の大恐慌、大豊作による米価の大暴落	○酒田町職業紹介所による求人開拓通関の発給 ○本間家による小作人への無料子での金の貸付、酒田市への一万円寄付
昭和6 (1931)	△昭和の大恐慌の影響による不況	○酒田町による失業対策事業としての小中学校の改築、酒田港修築、下水道幹線工事、屠畜場の移転、山道整備、国道改修工事、架橋工事
昭和9 (1934)	▲異常気象(雪害、風害、水害、冷害)による農産物への大被害	○酒田市による新開地等からの救済物資の凶作農家や困窮家庭への配給 ○本間家による小作人3000人への凶作見舞いとして玄米1俵ずつの支給 ○失業救済工事としての日山公園の窪地の埋立工事、市道の舗装工事、側溝工事などの土木工事 ○時局民救事業としての漁獲の増進 ★救済事業として佐藤家庭園(遊佐町下長橋)作庭

註): 1)「飢饉」欄の▲は天災(冷害、水害、旱害、風害、雪害、虫害、地震)、△は人災(不況、失業、農政の貧困、流行病の蔓延等)を示す。

2)「救済事業」欄の直接的な救済事業として○は義捐金の寄付・給米・米安売座の開設・低利子の金貸付、間接的な救済事業として◎は建設・土木工事、★は作庭工事を示す。

ける豪農の庭園趣味の存在が確認できる。また、昭和9年遊佐町の豪農である渋谷家庭園では、当主自らが各地の庭園を訪れて構想を立て庭園を造っている³²⁾。

以上のことより、地主の庭園に対する憧れの強さを伺い知ることができ、庄内地方の庭園とは、地主の経済力と文化の高さを示すステータスシンボルであったと考えられる。

(2) 地主の小作人に対する救済事業としての作庭

豊かな庄内地方でも、水田単作地帯の常として冷害・洪水・旱

図-1 遊佐町・渋谷家庭園における救済事業例

〈渋谷家庭園作庭の概要〉

- ・飢饉により小作人から仕事を求められたため、当初100坪程度の庭園を造るつもりであったが、隣地を買収して庭園面積を560坪に拡大して小作人の救済事業として造った(右図)。
- ・遊佐町の大地主堀家の庭園の材料を、同町の佐藤家(本研究対象)と買い分け庭園の一部に使用している。その中には当時1反歩(=10a=0.0001km²)の田と交換した鳥海山の形状によく似た鳥海石もある。

図-1 遊佐町・渋谷家庭園における救済事業例

魃などによる凶作が頻繁に繰り返され、飢饉となることも多々あった。小作人を擁する地主にとって小作人が窮民化することは、経済基盤である米の減収につながるため、小作人に対する地主の救済対策は必然的な措置であった。

庄内地方に起った主な飢饉と、その救済事業の内容(表-3³³⁾~³⁷)を見ると、飢饉直後の直接的な救済事業としては地主・商人・医者・藩主などによる米・粥の施与、義捐金の寄付など、また飢饉後の不況、失業に対する間接的な救済事業としては、地主・行政による農閑期の小作人の窮民化防止、冬期の港湾労働者の失業対策を目的とした、大規模な道路・河川・橋梁などの土木工事や建設工事における単純労働作業などが行なわれ³⁷⁾ ³⁸⁾、作庭も救済事業の一つとして実施され多くの小作人や失業者が救済された。

遊佐町・渋谷家では当初100坪程度の庭園を造る予定が、救済事業のため隣地を買収し560坪まで庭園面積を拡大し(図-1)、10万円の巨費を投じて作庭したり、冬期は多くの小作人を雇って雪櫃(そり)による巨石・巨木の運搬作業を行っていたが、春から秋までは雪櫃による大人数での作業が行なえないため少人数ずつ順番を割り当て、より多くの小作人が仕事を出来るよう、完成を急がず工期を8年間と長期化したりしていた²¹⁾。

また、遊佐町の佐藤家では、昭和9年当時、その日食べるものにも困るほどの状況に対して報酬を金銭ではなく、小家族で2~3日食べられる程度の2~3升の米を与えたり、食事付にしたりしていた²⁰⁾ ³⁹⁾。

救済事業の多くは、地主によって行なわれたものであり、経済力のある地主が凶作による飢饉や失業という緊急時において経済的援助、雇用機会の創出などで庶民の救済を行なう重要な役割を担っていたことが考えられる。

その中で雇用機会の創出を目的として行なわれた作庭は、行政による大規模な建設・土木工事とは異なり、個人により行われた小規模工事のため、地主によってより多くの雇用機会を設けるための工事長期化・工事規模拡大・実用的な報酬への転換など様々な配慮がなされていた。

(3) 地域性を活かした作庭技術

山形県庄内地方では、冬期の農閑期になると積雪により屋外で

図-2 救済事業庭園を取り巻く環境とその意味

の作業がほとんど行なえず、主に屋内での薬仕事を中心であったが³⁶⁾、凶作時となると仕事は無く、食料不足に陥った。また、酒田港では冬期になると海が荒れて北前船の出入りが途絶えがちとなり、荷降ろしの港湾労働者も失業状態に陥った。

それに対して、地主が冬期に行なわせた救済事業庭園における労働内容は、鳥海山の裾野に位置する遊佐町の渋谷家で見られるように、主に庭園材料である地場材の鳥海石の巨石や巨木を大持ち櫃(ぞり)という雪櫃に載せ⁴¹⁾ ⁴²⁾、多いときには老若男女200人にのぼる村人・小作人に雪上を運搬させるといったものであった。また、櫃の上ではタイミングを合わせて運ぶための音頭取りが合図をしたり、芸者が踊ったりと、祭りのような賑やかさの中で行われていた²¹⁾。

なお、庄内地方の一般的な庭園における雪を利用した造園技術としては、燈籠設置の際に各部をその都度雪に埋めることで、重い燈籠各部を持ち上げることなく滑らせることで燈籠を据えたり、谷形の庭園中央部への石材運搬の際には雪を固めて下り坂を作り石材を滑らせて運び入れたりするところもあった³⁹⁾。

以上、地主が失業時期と重なる冬期に小作人・失業者に行なわせた救済事業としての作庭では雪を効率的に活用し、雪国という地域性を活かした庭園材料の運搬作業を行ない、雇用機会の創出をも可能にしたと言える。

4. 救済事業庭園の有する意味

以上の分析・考察から、救済事業庭園が成立した要因としては以下の3点に集約される。

- ①作庭への憧れ—地主のステータスシンボルとしての庭園
- ②救済事業の必然性—飢饉による小作人の窮民化・冬期の失業者増加の防止

③雪国という作庭環境－庭園材料の運搬作業に適した雪国の地域性

図－2は救済事業庭園成立の関わりをまとめたものである。図中の「地主」は豊かな稲作地帯での大規模な土地集積による経済基盤と、北前船による上方交易によって醸成された文化基盤を持つ山形県庄内地方の地主全体を意味する。「小作人・港湾労働者」は、地主制度の下、地主の支配下にあった小作人と、港町・酒田で行なわれた上方交易の中で地主・豪商に雇われ荷降ろしを生業としていた港湾労働者を意味する。「庭園」は山形県庄内地方の庭園を意味する。この三者は、救済事業庭園が成立するための重要な要素と言える。

また、その三者を取り巻く環境として、「経済基盤としての豊かな稲作地帯」、「文化基盤としての北前船による上方交易」、「雪国」が存在し、これらが「飢饉」に対する救済事業庭園の成立を可能にした経済力、文化力、地域力となっていると考えられる。

三者の相互関係からは、庄内地方において庭園は地主が財力や文化的素養を示すための「ステータスシンボル」として存在し、地主が飢饉で困窮する小作人・港湾労働者を救済するために「救済事業」を行い、小作人・港湾労働者が報酬を得るために「労働」を行って救済事業庭園が造られたと言える。

そして、救済事業庭園の有する意味としては、作庭工事においては、①多くの労働力を要する、②工期が長期間にわたる、③仕事の少ない冬期にも実施されるなど、小作人や港湾労働者の「雇用機会の増大」をもたらすという社会政策的側面が明確となった。

また、作庭においては雪国という地域条件を活用し、橿を用いて重い庭園材料を効率的に運搬、あるいは燈籠各部の設置に活用するなど、現在においてはマイナスの要素が強調される雪を十分に活かした「作庭技術としての利雪」が、山形県庄内地方で行なわれていたことも明確となった。

すなわち、山形県庄内地方の救済事業庭園には、庭園成立時における「雇用」という社会政策的側面が見られたり、庭園が造園されるにあたって地域固有の技術が見られたりと、造園原論的意味が存在していたと考えられる。

これまで造園における庭園研究は、造形的側面・個別庭園史として論じられることが主流であったが、本研究では、庭園は単に娯楽や趣味ではなく、社会経済政策的な飢饉対策と、雇用増大という目的で庭園が造られたという、従来の庭園史研究では論じられていなかった社会経済的な意味を、山形県庄内地方の救済事業により作庭された庭園の詳細を解明することによって立証した。

さらに、東北三大地主の一つである秋田県仙北町の池田家の所有する庭園が平成16年に国・文化財の名勝に指定されたように⁴³⁾、現在、近代の地方庭園への関心も高まりつつある中、本研究により研究不在の山形県地方における庭園、特に近世から近代にかかわる地主の庭園の側面も明らかとなった。

謝辞：(財)本間美術館、酒田市公園緑地係、藤井治康氏、阿部とく氏、齋藤文平氏、佐藤統嗣郎氏、渋谷守氏の他、関係者の方々には資料提供、調査等のご協力を賜りましたこと、厚く御礼を申し上げます。なお、本研究は、平成16年度東京農業大学大学院高度化推進経費による助成の成果の一部である。

文献・註

- 1) 荘内日報社(1958)：荘内名園百景：荘内日報社、1-100
- 2) 荘内日報社(1972,1)：お庭拝見：荘内日報社、3-42
- 3) 荘内日報社(1972,10)：お庭拝見：荘内日報社、4-53
- 4) 聞水苑(孝順寺庭園・旧齋藤家庭園)(北蒲原郡安田町)、市島家庭園(北蒲原郡豊浦町)、渡辺家庭園(新潟市)、太古山日長堂庭園(新潟市)、満福寺(村上市)－新潟県教育委員会(1988)：新潟県の庭園(下越・佐渡地区)：新潟県教育委員会、24-25,29-30,40、龍雲寺庭園(柏崎市)－新潟県教育委員会(1990)：新潟県の庭園(上越・中越地区)：新潟県教育委員会、19
- 5) 余目町郷土史研究会(1997)：ものがたり余目誌(下巻)：余目町郷土史研究会、148-149
- 6) 荘内日報社(1958)：荘内名園百景：荘内日報社、32, 49, 82, 86
- 7) 荘内日報社(1972,1)：お庭拝見：荘内日報社、17
- 8) 荘内日報社(1972,10)：お庭拝見：荘内日報社、15, 17
- 9) 酒田市編纂委員会編(1995)：酒田市史(改訂版)下巻：酒田市史編纂委員会、834-839
- 10) 菊池豹次郎(1886)：山形県管内持丸長者鑑：菊池豹次郎
- 11) 山形県庭園研究会(1999)：庭園研究 県内庭園研究・紹介(山形県古庭園ガイド)：山形県庭園研究会、23-25
- 12) 重森三玲・重森完途(1972)：日本庭園史大系～現代の庭～：社会思想社、4-9
- 13) 佐久間佑生(1961)：現代庄内人物名鑑：羽陽社、206-207
- 14) 菅原啓(1958)：最新山形県人物事典(4)：山形評論社、148-149
- 15) (財)本間美術館館長・高瀬靖氏へのヒアリング調査(2004年4月28日、酒田市・本間美術館で実施)
- 16) 藤井治康氏へのヒアリング調査(2004年6月15日、酒田市・藤井家で実施)
- 17) 酒田市建設部都市計画課公園緑地係・渡部卓氏へのヒアリング調査(2004年6月15日、酒田市役所で実施)
- 18) 阿部とく氏へのヒアリング調査(2004年5月1日、余目町・阿部家で実施)
- 19) 齋藤家へのヒアリング調査(2004年9月10日、立川町・齋藤家で実施)
- 20) 佐藤統嗣郎氏へのヒアリング調査(2004年4月27日、遊佐町・佐藤家で実施)
- 21) 渋谷守氏へのヒアリング調査(2004年6月16日、遊佐町・渋谷家庭園で実施)
- 22) 阿部家での現地・実測調査(2004年5月1日)
- 23) 齋藤家での現地・実測調査(2004年10月26, 28日)
- 24) 佐藤家での現地・実測調査(2004年4月28-30日)
- 25) 渋谷家での現地・実測調査(2004年9月7, 9-11日)
- 26) [ジュニア版]酒田の歴史編集委員会(1993)：[ジュニア版]酒田の歴史：酒田市教育委員会、84
- 27) 菅野正(1975)：稲作農業の展開と村落構造：お茶の水書房、34
- 28) 酒田市史編纂委員会編(1987)：酒田市史：酒田市、620
- 29) 佐藤三郎(1972)：酒田の本間家：中央企画社、134-137
- 30) 加藤造園・加藤芳雄氏へのヒアリング調査(2004年4月28日、余目町・齋藤家で実施)
- 31) 鶴岡市史編纂会編(1996)：生活文化史料・鶴岡市史料・庄内史料集20：鶴岡市史編纂会、235
- 32) 荘内日報社(1958)：荘内名園百景：荘内日報社、49
- 33) 立川町(2000)：立川町史・上巻、立川町、1050-1060
- 34) 酒田市編纂委員会編(1995)：酒田市史(改訂版)上巻：酒田市史編纂委員会、696, 741-769
- 35) 鶴岡市役所(1975)：鶴岡市史・上巻、エビスヤ書店、389-400
- 36) 鶴岡市役所(1975)：鶴岡市史・中巻、エビスヤ書店、485
- 37) 春日儀夫(1980)：目で見える庄内農業史：エビスヤ書店、81-87, 172-174
- 38) 酒田商工会議所100年史編纂部会(1997)：自由都市、酒田から【人ハ時代ヲ意匠ス】：酒田商工会議所、134-135
- 39) (株)佐藤造園・佐藤和三郎氏へのヒアリング調査(2004年4月28日、藤島町・(株)佐藤造園で実施)
- 40) 余目町教育委員会編(2001)：余目町の民俗・年中行事：余目町教育委員会、12, 36, 46, 57
- 41) 森浩一(1985)：日本民俗文化大系[普及版]第13巻：技術と民俗(上) 海と山の生活技術誌二：小学館、299-307
- 42) 日本民具学会編(1988)：山と民具・日本民具学会論集2：日本民具学会、140-144
- 43) 文化庁文化財部(2004)：月刊 文化財二月号(485号)：第一法規、14-15